

小児科病棟におけるオンライン保育について

Online childcare in the pediatric ward

中 島 志 保

Shiho NAKAJIMA

要 旨

当院小児科病棟では、入院中の乳幼児を対象にボランティア保育士による対面での集団保育を行ってきた。コロナ禍となり、全ての院内ボランティア活動が休止となったため、昨年2月下旬から保育も休止となった。しかし、同年5月に院内学級のオンライン授業開始を機に保育のオンライン化を検討し、パソコンなどの機器を揃え、同年6月上旬からオンライン保育を開始した。週1回、保育士二人の体制から始まり、Zoomの導入、保育士の増加を経て、平日はほぼ毎日保育を実施できる体制を築いてきた。病室から出られない子どもはタブレットでベッド上から参加し、通院治療に移ったがまだ保育園等へ通えない状況の子どもは自宅から参加する。オンラインゆえの利点を活かし、困難さの解決を検討しながら、今後もオンライン保育を継続していくことが、子どもと保護者を長期的に支援していくために有効と考える。

はじめに

当院小児科病棟では、主に小児がんの子どもたちが数か月以上の入院生活を送っている。これまでボランティアを中心とした様々な余暇活動が提供されていたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、ボランティアの受け入れが困難となった。しかし、オンラインを活用した試行錯誤を続け、いくつかの活動を継続的に実施できるようになった。こうした活動の中でも最も早くからオンライン実施を試み、現在は毎日活動を行っている保育について紹介したい。

I 経過

1. 当院小児科病棟のこれまでの状況

小児がんを発症した子どもは、疾患の種類にもよるが数か月の入院治療を行うことが多く、小児がんの約4割を占める小児白血病では1年近くの入院となることも珍しくない。そのため、義務教育年齢の子どもに対しては院内学級（病弱・身体虚弱特別支援学級）や訪問教育によって教育が継続される。当院小児科にも新潟市立鏡淵小学校と同市立白新中学校から教諭が来院して授業を行っている。高校生に

ついては、学校によって対応は様々であるが、課題の提出やオンラインを活用した授業参加によって単位取得が可能となることが増えてきた。ところで、急性リンパ性白血病は小児がんの中で最も高い頻度の疾患であり、どの年齢でも発症するが特に2～5歳に多いと言われている。つまり、保育の対象となる年齢の子どもが入院患児に含まれる可能性は高く、子どもの成長・発達を援助するために小児科病棟には保育を提供できる体制を整えておく必要があると考えられる。当院の状況で言えば、ボランティアによる保育が休止となった2020年2月から現在までの間に限って見ても、未就学児だけで最少1人、最多8人が同時期に入院していた。こうした未就学児の入院状況の中、当院では、ボランティアの保育士による集団保育が長年実施されており、子どもだけでなく付き添いの家族を支援する役割も果たしてきた。保育は、平日10時から11時過ぎまで、小児科病棟のプレイルームで行われていた。

2. コロナ禍の始まりとオンラインの試行錯誤

2020年2月、新型コロナウイルスの感染が拡大し、院内のボランティア活動が全面禁止となった。小児科病棟の保育も当然休止となった。同年3月には全国的に小・中・高校の一斉臨時休業が実施さ

れ、院内学級もしばらくの間休止することになった。入院している子どもたちは、初めこそ自由に遊ぶ時間が増えて楽しそうにしていたが、だんだん時間を持て余すようになり、苛立ちや不機嫌さが見られるようになっていった。小学生の中には明らかにイライラした様子で過ごしている子どももいた。先が見えないまま5月を迎え、一般の学校で登校が再開されたことに伴い、院内学級の再開が検討された。担当教諭が病棟へ入って子どもたちと接触することは感染リスクが高いと判断され、小児科に使用可能なタブレットがあったことと院内学級用のネットワーク回線があったことから、小学校の院内学級においてオンライン授業を始めることになった。この院内学級のオンライン化については、小児科医師と院内学級担当教諭の尽力が非常に大きく、著者は傍で見ていただけであったが、画面越しに教諭と会って話す小学生の楽しそうな様子が強く印象に残っている。オンライン授業を受けていくうちに、イライラしていた小学生は落ち着いて過ごせるようになっていった。6月になると近隣では一斉登校と通常授業が再開となり、下旬には院内学級も対面授業を再開する方針となった。保育については、あくまでもボランティアの活動であるため、病院としての院内ボランティアの活動方針に合わせていくこと、即ち以前のような対面での保育は当面不可ということになった。だが、オンライン授業を受けた小学生の変化や一般の乳幼児を対象としたオンライン保育が実施され始めていたことから、入院中の未就学児へのオンラインでの保育の実施を検討する流れとなった。パソコンやタブレットの準備、院内学級のネットワーク回線の借用、ボランティア保育士との打ち合わせを経て、2020年6月11日、自宅にいるボランティア保育士がプレイルームにいる子どもたちに保育を提供するという形で、初回のオンライン保育を実施した。

当時入院していた未就学児は2～5歳の3人であった。入院前に保育園通園の経験がある子どももいない子どももいた。当日担当したボランティア保育士と面識があるのは1人だけであった。最近の子どもたちは、乳幼児といえども日頃からスマートフォンやタブレットに触れており、この3人も家族とテレビ電話でごく自然に話し、YouTubeなどの動画視聴にも慣れていて、だが、いざモニターの中からボランティア保育士が話しかけると、戸惑い、固まってしまうという反応になった。見知らぬ大人が突然画面の向こうから自分の名前を呼び、声をかけてきたことへの驚き、怯え、恥ずかしさがあるようだった。また、マウスやキーボードといった見慣れない機械に興味向き、触りたがって痲癩を起し、保育そっちのけになってしまう子どももいた。そうした状況

ではあったが、やはり保育園経験のある子どもが徐々に保育士へ応答し始め、歌やお話、手遊びなどを行って、30分ほどで初回のオンライン保育を終了した。子どもたちの反応は笑ったり泣いたり様々であったが、付き添いの保護者たちは保育という時間を持てることを押しなべて喜んでくれた。結果的に、定期的に継続していくことが決まり、週1回、30分～1時間程度で実施することが定着していった。8月になる頃には、子どもたちの人数が5～6人くらいまで増えたが、どの子どももオンライン保育にすんなりと馴染み、オンライン保育に参加することが「日常」となった。会話の中で「明日は保育でしょ」という言葉が聞かれたり、開始時間前にプレイルームで待っていたりと、親子ともにオンライン保育を心待ちにしている様子が見られた。

3. オンライン保育の日常化と活動の拡がり

入院している子どもたちの「日常」と化したオンライン保育は、その後一定の形に定まることなく変化を続けていった。感染予防のためにプレイルームを同時に使用できる人数に制限がかかると、週2回の保育の内容を同一にして、子どもたちみんなが同じことを楽しめるようにした。秋を迎える頃には入院治療を終えて在宅での通院治療に切り替わる子どもが出てきた。通常であれば主治医の許可を得て、疾患や治療による差はあるものの、退院後数か月が経過すれば保育園や幼稚園に通園を始めていた。しかし、新型コロナウイルスの感染状況が収まらない中で、当面通園は控えて自宅からオンライン保育へ参加したいという要望が挙がった。そこで、それまでappleのFacetimeで行っていたオンライン保育をZoomに切り替え、通院治療中でオンライン保育に参加希望の方にはIDとパスワードを渡すことにした。後になって考えるとZoomに切り替えたことのメリットは大きく、入院しているものの治療の影響で個室から出られない子どもや骨髄移植のためにクリーンルームにいる子どもも、タブレットさえあればオンライン保育に参加し、ほかの子どもたちと同じ時間を共有できるようになった。

保育での成功体験をベースとして、これまで小児科病棟で提供されてきたいろいろな活動をオンラインに移行していくことが検討されるようになった。2021年3月下旬には、ボランティア保育士の尽力と新潟市水族館マリニピア日本海の協力のもと、オンライン水族館見学を行った。これはちょうど春休み中でもあったので、入院している小学生も参加でき、結果として病棟行事のバスハイクに代わる体験となった。マリニピア日本海のオンライン見学は6月にも実施した。以前はボランティアが来院して病室やプレイルームで行っていた絵本の読み聞かせや音楽療法もオンラインで定期実施できている。2019

年に当院講堂で開催した『病院がプラネタリウム』（一般社団法人星つむぎの村による出張プラネタリウム）を、2020、2021年は『フライングプラネタリウム』に替え、機器類を当院へ配送してもらい、病棟の院内学級教室を即席プラネタリウム室にしてYouTubeライブを利用した投影とZoomを使った交流を行った。加えて、認定NPO法人ハートリンクワーキングプロジェクトの支援を受け、毎月2回県内各所からのオンライン配信やホスピタルクラウンの配信を見ることができている。オンラインを活用することによって、入院していてもいろいろな人と交流し、いろいろな体験をし、楽しさ・嬉しさ・驚きそのほかいろいろな感情を経験することが可能になった。直接の対面や体験にはもちろん及ばないだろうが、入院している子どもたち、付き添いの保護者たちの治療の日々を支え、子どもたちの成長・発達をサポートする一助になっていることを願う。

Ⅱ オンライン保育のメリットと改善点

オンライン保育を実施して1年4か月が過ぎた。この間に1歳過ぎから就学直前まで幅広い年齢の子どもたち10数人がオンライン保育を体験した。実行してきた中で子どもたちを見聞したり、一緒に過ごしたりする中で感じたことや気が付いたことについて述べたい。メリットややって良かったと思われること、また今後改善する必要があることを表1に示す。

まず、やって良かったと思われるポイントやメリットについてだが、「子どもたちの生活にメリハリ・リズムができる」という点は、入院・在宅を問わず起きる効果のようである。保育のそもそもの役割としての「年齢相応の成長発達の促進」も重要である。院内学級で勉強する小・中学生や学習支援を受ける高校生にも同じことが言えるが、治療とは

違うことをする時間が生活の中に組み込まれていると、その間は「治療・病気から気持ちが離れ」て、子どもとしての当たり前の時間、経験を持つことはできるようなのである。その時間があるからこそ、また「気持ちを切り替えて治療に取り組める」のであろう。在宅で外来治療を受けている子どもたちに注目すると、これまでは退院すると医師・外来看護師以外の関わりは困難であったが、オンライン保育であれば自宅から参加でき、「子ども同士、親同士で交流でき」、「孤立感が緩和される」傾向があるようだ。気になる点、改善点としては、病院・病棟としてはインターネット環境の整備が不十分なため、「個室対応の子どもが多いとインターネット接続が不安定になりやすい」。レンタルのポケットWi-Fiを追加して対応しているが、子どもたちが快適にオンラインの活動へ参加できるように、病院全体でのインターネット環境の整備が進むことを願う。新型コロナウイルスの感染拡大の状況によっては、プレイルームの使用に再び制限がかかる可能性があるが、前述のインターネット接続の問題と、異年齢の子どもと一緒に保育活動へ参加することのメリットが減損する危惧が生じることとなる。異年齢保育において、年長児が年少児を思いやり、年少児が年長児をモデルとするなど、相互的に成長・発達へ影響を与え合うというメリットをオンライン保育でも維持できるように工夫していきたい。また、ボランティア保育士の意見として、対面保育の際にはちょっとした隙間の時間に保護者とおしゃべりする中で育児相談を受けるなど親支援を行っていたが、オンラインでは個別の支援が困難であるとのことである。この点についても、今後改善策を考える必要がある。

おわりに

当院小児病棟におけるオンライン保育の試みと経

表1 オンライン保育のメリットと改善点

やって良かったと思うポイント・メリット	やっいて気になるポイント・改善点
・子どもたちの生活にメリハリやリズムがつく	・個室対応の子どもが多いとインターネット接続が不安定になる ※高校生の学習支援が重なるとなおさら
・年齢相応の成長発達の促進	
・医療関係者以外との関わりを持てる	
・親子共に治療・病気から少しだけ気持ちが離れる	・プレイルームの使用に人数制限がかかると、子ども同士の交流が難しい
・気持ちを切り替えて治療に取り組める	・在宅の子どもへの工作材料の受け渡し
・孤立感（特に親）が緩和される	・オンラインを介して保育士が親を支援することが困難
・離れた場所にいる子ども同士が交流できる	
・在宅の子どもたちへの支援ができる	・Zoom操作のスキルアップ、機材の拡充
・病棟行事への応用が可能	

過について述べてきた。現在、平日の午前中はほぼ毎日オンライン保育が実施されている。オンライン保育を担っているのは、保育士5名と日本子ども福祉専門学校の学生25名（保育士資格所持）であり、全員がボランティア登録をしている（2021年10月末時点）。オンラインの運営、材料の受け渡し、プレイルームでのサポートなどは、著者と保育等運営担当のスタッフ（今年度から午前中2時間のみ1名配置）が行っている。

小児がんにより長期間の入院治療を余儀なくされる子どもと付き添いの保護者を支えるため、また自宅へ戻った子どもと保護者が孤立しないようにするために、オンライン保育を始めとした様々な活動の提供を検討し実行してきた。新型コロナウイルスの感染状況が縮小していくことになれば、ボランティ

ア保育士が病棟内に入り、対面での保育が可能になると予想される。もしそうなったとしても、個室対応の子どもや在宅で治療を続けている子どものために、またオンライン保育のあり方を変化させながら対応していきたい。

参考文献

- 1) 国立研究開発法人国立がん研究センター：がん情報サービス 小児がんについて. [2021.10閲覧] https://ganjoho.jp/public/knowledge/about_childhood.html
- 2) 国立研究開発法人国立がん研究センター 希少がんセンター：様々な希少がんの解説 小児の血液・リンパのがん. [2021.10閲覧] https://www.ncc.go.jp/jp/rcc/about/pediatric_leukemia/index.html
- 3) 一般社団法人日本医療保育学会：医療保育の理念. [2021.10閲覧] <https://iryohoiku.jp/philosophy/>